

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

March 2020 vol.31

15th

グラントワ
Grand Toit

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「竹久夢二と乙女たち —あこがれの美人、ときめきのモダンライフ」

島根県出身画家、瀧秋方の美人画とその活動

企画展「生誕150年 大下藤次郎と水絵の系譜」

水彩画家の背景に見る、様々なヒューマンドラマ

企画展「ファッション イン ジャパン 1945-2020—流行と社会」

戦後日本のファッションを「カワイイ」を切り口に考えてみる

31



竹久夢二《赤い手袋の女》大正時代初期 個人蔵

「竹久夢二と乙女たち あこがれの美人、ときめきのモダンライフ」

2020年4月18日(土)～6月8日(月)

休館日:毎週火曜日(ただし5月5日は開館) 開館時間:午前9時30分～午後6時(展示室への入場は17時30分まで)



図1



図2



図3

図1. 瀧秋方《近代麗人画譜「港街の日本娘」》
1932年、個人蔵

図2. 瀧秋方《近代麗人画譜「明眸」》
1932年、個人蔵

図3. 瀧秋方《鏡獅子幻想》1940年
(東京文化財研究所所蔵絵葉書より複写)

島根県出身画家、瀧秋方の美人画とその活動

企画展「竹久夢二と乙女たち」(表紙)では、大正から昭和初期にかけての夢二以外の画家たちの作品も多数展示する。その中に、瀧秋方^{たき しゅう ほう}*1の4点組の版画『近代麗人画譜』がある。昭和11年(1936)発行、モダンな「港街の日本娘」(図1)のほか、文金高島田の花嫁、スードの女性(図2)など、1つのシリーズの中でも多様な作風が見られる。寡聞にして初めて接する名前だったが、島根県出身画家と知ったため、ここに文献調査で分かったことを記しておきたい。

『日本美術年鑑』(昭和15年版)によれば、瀧の本名は甚一、明治35年(1902)年島根県生まれ。大正11年(1923)から昭和2年(1927)まで韓国、満州、中国及びインドに旅行し、帰国後の昭和6年から13年まで大阪朝日新聞社絵画嘱託の仕事にたずさわった、とある。この頃は大阪府池田市に在住していた。『広瀬町史』(昭和43年)に名前があり、広瀬小学校および中学校に作品が寄贈されているため、同町出身と考えられる。

昭和10年代には日本画家としても積極的に活動していた。記録が残っているだけでも、昭和11年(大阪・朝日ビル専門大店)、12年(大阪・有恒倶楽部)、14年(大阪・有恒倶楽部)と3度の個展を開催している。

今回の企画展で紹介する版画は最初の個展開催の年の作品で、すでに完成された作風が見える。

秋方は帝展や院展には出品せず、関西の新しい美術運動に参加していた。昭和12年創立の日本画の団体「墨人会倶楽部」の会員に、小杉放庵や津田青楓、小松均らと共に名を連ね、展覧会に出品した。これと重複するメンバーが参加して翌13年に結成された「疎韵会」は、連絡先が秋方の自宅となっている。そして昭和14年10月には、自らが責任者となり「圏外社」を立ち上げた。15年3月開催の第1回展の展評^{※2}には「主唱者瀧秋方氏の画歴なるものが一向に画壇にも世間にも知られていない」とあり、全国区の画家ではなかったことが分かる。しかしその評者も展覧会を見て秋方の実力に驚き、激励と期待の言葉を述べている。

同年12月に大阪そごう百貨店で開催された「圏外社試作美術展覧会目録」表紙には、「圏外社は野逸性ある作家と共に純粹藝術の責任ある行動に於て異色ある新日本画の確立を期す」と意気軒昂とした文が掲げられている。ここで秋方は縦横7尺(約2.1メートル)の美人画の大作(図3)のほか、花鳥画、風景画、静物画と多彩な主題を描きこなしているが、この技量をどこで身

につけたのだろうか。昭和39年刊行の画文集『奥の細道・車の旅』(日研出版)の略歴欄、および昭和55年版『日本美術年鑑』の物故記事にも学歴や師匠についての記述はない。『近代麗人画譜』付属の英文の目録によれば、13歳(大正3年頃か)から日本画を学び、鐺木清方への入門を望んで上京するもかなわず、東京美術学校進学を目指して川端画学校で絵を学んだようだ^{※3}。

昭和16年の圏外社第2回展には襖8面の花鳥画をはじめ大作を数点出品した。その後「圏外美術院」と改称し展覧会も回数を重ねたが、戦争により団体での活動は途絶した。戦後は団体に属さず活動し、昭和54年(1979)4月に没した。

秋方の日本画は、安来市広瀬町に現在も残されている。今回は企画展にあわせ昭和10年代の活動をごく簡単に述べるにとどまったが、今後も機会があれば県出身の画家として紹介してゆきたい。

※1 「滝」の字が用いられることもあり、「滝方」と号すこともある。
※2 斎田素州「圏外社第一回展」『塔影』16巻5号、昭和15年
※3 「東京美術学校一覽」の名簿に島根県出身の瀧(滝)という生徒の名前は確認できなかった。

本稿執筆にあたり、安来市加納美術館の神英雄館長にお世話になりました。記して感謝申します。

「生誕150年 大下藤次郎と水絵の系譜」

2020年7月11日(土)～8月31日(月)

前期:7月11日(土)～8月3日(月) / 後期:8月5日(水)～8月31日(月)

休館日:火曜日(ただし8月11日は開館) 開館時間:午前9時30分～午後6時(展示室への入場は17時30分まで)

企
画
展



A



B



C

A. 大下藤次郎 明治29年5月9日 京都にて(撮影者:京都市寺町御池北 旭館)

B. 大下藤次郎《秋の雲》1904年 水彩・紙

C. 人物スケッチ(「森脇錦屋(屋)の扮装」)

いずれも島根県立石見美術館蔵

水彩画家の背景に見る、様々なヒューマンドラマ

島根県立石見美術館に足を運んでくださる方は、この画家の絵を一度は目にしたことがあるかもしれない。大下藤次郎(1870-1911)(図A)は、ほぼ明治の始まりとともに生を受け、終わり頃に42歳の若さでこの世を去った。明治期を代表する水彩画家であり、その普及に人生を捧げ、日本における水彩画の地位を確立させた画家である。生誕150年にあたる今年、大下藤次郎の作品と資料を数多く所蔵する当館では、大下と彼を取り巻く人間模様を軸に、今までにない大下藤次郎展をお楽しみいただく。

大下の描く水彩画は、ほとんどが戸外に赴き、自然と向き合って描いた風景画である。といっても名所旧跡は少ない。どこにでもある家の軒先に咲くあじさいや、見上げると壮大に広がる鱗雲(図B)。そして、一切の音を吸い込むような静寂の水辺などが主題となっている。いずれもその場の光や色を吸収し、風やにおいや音を感じながら、大下が夢中になって制作したことが感じ取れる。大下が外の風景を描くことに目覚めた最初は、1893(明治26)年、24歳の時。この頃の大下は、洋画家の中丸精十郎の画塾に通っていたものの、多くの不動産を管理し、手広く事業を営んでいた父の跡継ぎとして、家業に専心しなくてはならず、繁忙

期はもとより、意のままに画塾に通うことなどできなかった。これは既に20歳の頃「絵で身を立てよう」と決意していた大下にとっては、相当にはがゆい日々であったと想像される。それでも、夜には画塾に通い、家業の合間や少しだけ空いた時間などに、独学で模写をしたり、家中の人物を密かに写生したりしていた。しかしこの頃に出会った三宅克己の卓越した写生画を見て感動した大下は、実景を写生し、自然に学ぶべきことの重要性を実感する。ちなみにこの三宅は、のちに大下にとっても師となる洋画家、原田直次郎の画塾に通い、いち早く水彩画家への道を志すことになる。大下より4つ年下であったが、大下は先輩として三宅を尊敬し、彼の絵の模写を何点も試みている。

戸外写生の重要性に気づいた大下は、この時すぐさま行動に移す。中丸の画塾で仲の良かった五人で写生同盟を結成し、細かく会則を取り決め、定期的に戸外写生に趣くことを自らに課す。一人ではなく仲間がいれば、強い意志で続けられるという意図が働いたのかもしれない。しかし、写生会は、個々の予定や、モチベーションの差などあって、なかなか全員の足並みが揃わない。大下自身も病を患ったり、父の看病やその死に伴う葬儀や家督相続の処理な

どで、何ヶ月も行けない日があった。会は十数回で終わったが、これをきっかけに、5人のなかで最も気の合う森脇英雄と真野紀太郎との友情が深まり、特に真野とはこの後、1895(明治28)年に二人で水彩画による戸外写生の会を作るなど、生涯にわたるつきあいが続いた。また、森脇はのちに「錦屋」の号で日本画家となり、渡米後は故郷の岩国で活動する。大下は若き日の森脇の後ろ姿のスケッチを残している(図C)。この写生を大切にすることは、その後全国各地を巡る写生旅行につながっていった。その土地に行かないと味わえない空気、揺れる草木や遠方に霞む山、その広大な距離感、空や海や土の色。全てが大下にとっては心が躍る絵の対象だったに違いない。この企画展では大下の作品はもとより、彼の二人の師、中丸精十郎と原田直次郎の作品、そして写生同盟の仲間である真野紀太郎と森脇英雄、大下と同じく専門の水彩画家として活躍した三宅克己と丸山晩霞、さらに同時代で交友のあった中川八郎、吉田博、石井柏亭らの水彩画の名品が一堂に並ぶ。気がつく、淡く柔らかく、どこか懐かしさに導かれる、水彩画の魅力にどっぷりとはまってしまうかもしれない。

(左近充直美 当館専門学芸員)

「ファッション イン ジャパン 1945-2020—流行と社会」

2020年9月19日(土)~11月23日(月・祝)

休館日:火曜日(ただし9月22日、11月3日は開館)、9月23日(水)、11月4日(水) 開館時間:午前9時30分~午後6時(展示室への入場は17時30分まで)

戦後日本のファッションを
「カワイイ」を切り口に考えてみる

早いもので、2020年秋に島根県立石見美術館は開館15周年を迎える。その節目に、当館の活動の柱のひとつ「ファッション」をテーマとした展覧会を開催する。本展「ファッション イン ジャパン1945-2020—流行と社会」は、戦後の日本のファッションを俯瞰し、その独自性をとらえ直す試みである。10年を一区切りとし、各時代を象徴するファッションを、衣服や写真、映像、雑誌などの資料により紹介する。あわせて、当時の社会の様子も想像できるような展示を目指し、準備をすすめている。

ところで「日本のファッション」と聞いたときに、どのようなファッションが頭に浮かぶだろう。トラッドなアイピースタイルや個性的なDCブランドの服、ゴスロリの奇抜なスタイル、手軽に手に入るファストファッションなど、いつ生まれたのか、また育った場所が都市部なのか、地方なのかによって想起するのは異なるのではないだろうか。実際、戦後ファッションの変遷をたどると、さまざまなスタイルが次々と現れており、そこに「日本らしさ」などといった特徴を見出すことは難しいように思える。

では、2000年代以降日本の都市部に

おける若者の着こなしが「カワイイ」ファッションとして世界的に認知されるようになってきているという現状は、どうとらえればよいだろうか。「カワイイ」は、今やファッションにかぎらず、アニメや漫画、ゲームなどの日本のサブカルチャーを語るには欠かせないキーワードだ。

ここでは、日本のファッションにおける「カワイイ」のルーツを考えたい。まずあげられるのが竹久夢二の仕事であろう。およそ100年前に、夢二は自身の版画とともに、自らデザインした浴衣や帯を、風呂敷や便箋などとともに港屋という店で販売した。夢二グッズのあたたかみのある造形は、現代のわたしたちが見ても文句なく「かわいい」。

夢二の仕事を引き継ぎ発展させたのが、中原淳一である。中原は昭和初期に雑誌『少女の友』に挿絵を提供し人気画家となった。同誌上で連載した「女学生服装帖」で、淳一は自身のイラストとコメントでおしゃれに装うコツを紹介した。第二次大戦中に刊行された『婦人標準服の作り方』にもイラストを提供している。驚くのは、戦争中に女性が着用するよう定められた標準服を、かわいらしく描き出していることだ(図1)。

戦後も、雑誌『それいゆ』などを主宰し、服のデザインに限らず、居住空間全体を機能を優先させるのではなく装飾的に整える術を提案した。

続いて、昭和初期に流行した銘仙の図案を紹介したい。当時洋装をしていたのは一部の女性に限られ、ほとんどはきものを着用していた。手軽に買える銘仙は普段着のきものとして人気を博し、流行を反映して次々と新しい柄が売り出され、女性たちがそれを消費するというサイクルが成立していた。この銘仙は、かわいらしい図柄で多くの女性たちの心をとらえたのではなかろうか(図2)。

1970年代から国内外で活躍したデザイナー高田賢三や金子功らが提案したスタイルにも、「カワイイ」要素はふんだんに見いだされる。また、1970年代以降女性雑誌などにより「センスのよい」雑貨が紹介されると、ファッションにとどまらず、生活のあらゆる局面に「カワイイ」は浸透していく。展覧会によって、こうした「カワイイ」の系譜も見えてくるかもしれないと期待している。

(南目美輝 当館学芸課長)



図1



図2

図1.「婦人標準服の作り方」
長谷川多津恵著 中原淳一挿図
新日本服研究会発行
1942年(昭和17)
島根県立石見美術館蔵
© JUNICHI NAKAHARA/
HIMAWARIYA

図2.《チューリップ模様単衣銘仙着物》
1940-44年(昭和15-19) 個人蔵